

はじめに

本書は、政治哲学の入門書、概説書として編んだものである。政治学のテキストや概説書は数多く出版されているが、政治哲学の概説書はそれに比べると少ないようである。それは、もちろん、大学で政治哲学が開講されているのは、法学部がある大学に限られ、法学部があっても政治哲学という講義科目が開講されていない大学のほうが多いという事情によるのだろう。しかし、それだけではなく、政治哲学には専門分野化しづらい側面があるからでもある。

歴史に残る仕事をしてきた政治哲学者には、必ずと言ってよいほど人間論があった。人間についての深い認識なしには政治についての包括的な認識を生み出すことはできないからである。それぞれの政治哲学者についての概説はできるとしても、政治哲学一般について概説することは難しいうえに、仮に可能だとしても著者の立場や視点が大きく作用すると思われる。それは免れないことだとしても、政治哲学の特性に注目することによって、政治哲学の見方や考え方を示すことはできるのではないかと考えて、本書を編むことにした。政治哲学の特性としては、次のようなことがあげられる。

第一に、政治哲学は、歴史や思想を媒介にして政治的事象を見ようとしている。科学的アプローチと違うのは、歴史性を重視している点である。縦軸に歴史や思想史があるとすれば、横軸には比較という視点がある。比較と言っても、世界のなかで自己を相対化するというマクロな視点のことである。「永遠の相のもとで」というように、政治哲学は「ここと今」を超えた認識を求めているのが、特徴である。

第二に、政治哲学は、基本的な政治概念の意味を明確化しようとする。そのさい、概念が歴史的にどのように変化してきたかを念頭に置いている。歴史的

に変化したため、主要概念は多義的な意味を具えている。政治概念の多義性という事実から目をそらさず、実際に使われている意味だけでなく理念的な意味もつかんでいくことが必要である。それは、語源に遡るとともに、時代を超えて変わらずに残っている要素を明らかにすることによって可能になる。

第三に、政治哲学は、正しい秩序の探求という問題関心によって突き動かされてきた。人間を圧政や抑圧から解放するとともに、新しい秩序に再統合していくということが、規範的政治理論、すなわち政治哲学の一貫した目標であった。現在、国民国家が政治統合の一般的形態となっているが、現在の国民国家システムが未来永劫続くものでないことは自明である。グローバル化が急速に進み、国民国家の枠のなかに人間を収めきれないことは明らかだからである。グローバル化の動きは不可逆的であり、われわれは人類社会を包含する政治秩序を構想していかなければならない時代に立ち至っていると言えよう。また、「公正な社会の探求」という、もう一つの課題については、政治理論では立憲民主主義体制が唯一正統性をもつ体制とみなされているが、果たして民主主義体制の正統性は揺るぎないものなのか。自由主義が資本主義と結びつき、格差を拡大させている現代において、自由民主主義に取って代わる政治原理はありえないのかということも焦眉の課題となっている。

しかし、そもそも政治哲学は政治科学（実証的な政治学）とどういう点で違うのか、また、政治哲学のパラダイムは古代から近代にかけてどのように転換したのか、現代の政治社会の枠組みを形成してきた近代の政治原理はどこに問題があり、どのように乗り越えることができるのかという問いにも答えておく必要がある。政治哲学も政治学の一部であることは間違いないのだが、科学的思考が発達し、実用化されているなかで、哲学的思考にはどのような意味があるのかを明示する必要に迫られているからである。あらかじめ哲学的思考の意義を述べるなら、論理的に思考すること、理念から現実を批判すること、理念に矛盾した現実には克服の方向を示すこと（ペリアゴーゲー：認識を向け変えること）にあると言えよう。

したがって、本書は、次のような3つの柱を立て、これらの問題に取り組むことをねらいとしている。

第Ⅰ部では、政治哲学の方法と課題を明らかにしたうえで、古代と近代の政

治哲学のパラダイムを示す。政治哲学は、西洋で生まれ、世界化していった知の体系であるが、政治哲学が何を問題関心にしてきたのかを示したい。古典的政治哲学については、ソクラテスとプラトンを中心に人間についての洞察と政治についての考察が不可分であったことを示したい。近代政治哲学については、とくにホッブズの政治哲学に焦点を当て、現代の政治社会を規定している近代政治哲学のパラダイムを明らかにしたい。本書は、政治思想史の本ではないので、取り上げる思想家も本書の問題設定によって限定せざるをえないことをあらかじめことわっておきたい。

現代政治のパラダイムとして押さえておかねばならないのは、現代の政治学で正統性を獲得したのが民主主義だということである。全体主義体制、権威主義体制、ファシズムは分析概念にはなりえても、規範概念にはなりえない。しかし、民主体制から全体主義体制に転換すること、民主体制がそれを支える市民次第で崩壊することは古代から知られていた。したがって、民主体制が唯一正統な政治体制だとしても、その基盤となる政治社会のあり方についての探究の必要はなくなる。さらには、民主主義の徹底化を図っていくにはどうしたらよいのかという問いにも答えていかねばならない。

第Ⅱ部では、近代国家の枠組みについて検討することにする。歴史的形成物である国民国家は、経済と情報のグローバル化によって国境の意味は相対化しており、21世紀にはこの動きはますます加速されると予測される。グローバル化がもたらす移民社会化、地域統合や地域連携は新しい世界秩序形成をもたらすのかという問題である。また、民族を軸に形成された国民国家は、その構成原理がゆえにどのような問題をはらんでいるのか、ということも明らかにしたい。それは、多言語・多文化で構成される人類社会にふさわしい世界秩序のあり方の探求へと向かうためにどうしても必要な作業であるはずである。したがって、近代国家の存在理由とその揺らぎを、主権、民族、言語、国境を越える人びと、世界統合の可能性という観点から考察する。

第Ⅲ部では、ハンナ・アレント、レオ・シュトラウス、エリック・フェーゲリン、カール・ポパー、ジョン・ロールズという、20世紀を代表する思想家の政治哲学への貢献を踏まえたうえで、現代政治哲学の課題を明らかにしたい。これらの思想家の打ち出した理念に注目し、現代社会の諸問題にどのように向

き合うべきなのか示すことをねらいとしている。

政治哲学の再構築という観点から重要なのは、20世紀において政治を人間の営みとして取り戻すための理論的視座がハンナ・アレントらによって築かれたことである。政治を国家現象ではなく集団現象と見るのは、多元的国家論によってもなされたが、近代国家の枠組みを真に乗り越えようとするなら、政治学の基本的概念を根底的に検討していく必要があるだろう。アレントが行なったのは、政治を人間に取り戻すための理論的営為であり、そのためには政治概念の再定式化が必要だったのである。ここでは、政治を市民の日常世界に定位させた思想家であるアレントを基軸に置いて政治概念を再検討し、政治の意味を明らかにしたい。

現代世界において自由主義が資本主義と結びつくことによって経済的格差や社会的不平等を生み出している現状があるので、自由民主主義に対するオルタナティヴを提示しなければならない。歴史的に自由主義に対置されてきたのは、共和主義である。とはいえ、現代において共和主義が注目されるのは、①共和主義は、民主主義の原型である無支配と関係している、②共和主義は、市民のあり方を指し示している、③共和主義の伝統の一つである理性的自己統治はポピュリズムの防波堤になりうる、という理由による。そのような観点から現代政治哲学における共和主義の位相を検討する。

さらに、開かれた社会の理念について、カール・ポパーとエリック・フーゲリンを取り上げ、検討する。また、現代政治哲学を特徴づけているのは、正義論であり、政治哲学にとどまらず、法哲学、経済学、倫理学にも大きな影響を与えたのがジョン・ロールズの正義論である。ロールズの提起した議論の性格とロールズ批判の諸相を取り上げたい。合わせて、ロールズ以後さまざまなかたちで展開している正義論も取り上げ、ロールズが扱わなかった諸問題をめぐって提起されている論点も検討したい。さらには、政治哲学が課題とすべきなのは、よりよき世界の探求であることを示したい。ユートピア的思考の意味を否定するわけではないが、世界をトータルに変革するのではなく個々の問題に取り組み、生まれたときよりも死んでいくときによりよき世界を残していく人間主義の思想が求められていることを明らかにしたい。

本書全体をとおして示したいのは、政治哲学的思考様式である。というのも、哲学が万人の営みであるように、政治哲学もすべての人の営みとすべきだからである。また、そうでなければならぬと考えるから、極力、専門用語は避け、日常世界のことばで書くように心がけたい。「われわれはどこにいて、どこに向かおうとしているのか」という観点から、政治学のみならず、隣接する学問分野の成果も積極的に取り入れ、総合的・全体的な認識を提示していきたいと考えている。

政治は人間の営みであり、人間が他者と共生している限り、永遠に続いていく営みである。ミクロなレベルでの政治とマクロなレベルでの政治をどのようにつなげていくかを考えつつ、全体のなかで個々の事実を認識するという視点を失わずに政治的事象を分析していきたい。日常世界から政治を理解し、生涯にわたって公的問題に関わり続ける市民の学問としての政治哲学を構想したのであり、本書はそのための一步にすぎない。

政治に関する情報はあふれるほどあるが、評論的知識と学問的認識との間には大きな違いがある。新聞や雑誌を読むことは大切だが、政治の底流で起こっている変化や政治社会の構造についての理解は、学問的探究をとおしてのみ十分に解明できる。本書で取り上げることができるテーマは限られているが、現代政治を思想的・歴史的に見るための目をもつための一助になることを意図して選んだ問題や課題である。本書は、政治的事象の本質を捉えるとともに、公正な社会の追求という政治哲学の課題を、できるだけ多くの人に共有してもらいたいと考えて編んだ本である。